
『魔女』と『親友』

流星 ノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『魔女』と『親友』

【Nコード】

N4772R

【作者名】

流星 ノル

【あらすじ】

「『私』と『魔女』」の番外編です。

普段の生活に慣れた『魔女』

そんな『魔女』に新たな試練がやってきます

そして、『魔女』は新たな罪を負うのです

『親友』かのじよの話をしようと思う。

『親友』かのじよは『魔女』わかしの第二の理解者。

第一は・・・皆わかつている事だろうね。

『親友』かのじよと『魔女』わかしは思えば

小学校四年から顔を知る仲だった

だが、その頃のお互いは

『虐める者』かのじよと『虐められる者』わかしだった

しかし、六年の最後の一週間

共に虐められ側にいたのが、『親友』かのじよだったのだ。

しかし、『魔女』わかしは『親友』かのじよを信じなかった。

中学に上がり、『親友』かのじよと共に居た

でも、信じられなくて、いつだって半信半疑で。

『私』じぶんにも言われたが

あの忌々しい噂が、『魔女』わかしの心を蝕んだ

『私』じぶんは言った

「今を楽しんでいればいいじゃない」

と。

『魔女』わかしは、そんなことがいえる『私』じぶんを殺したくて殺したくて泣

き崩れてしまう。

中学二年の頃だった。

『親友』かのじよに異変が起こる。

『親友』かのじよはいつものように「死にたい」というようになった。

『魔女』わかしにとって人の死は・・・

特に自害は絶対に許しがたい行為だった。

その日から、『魔女』と『親友』の対立合戦が始まった。

暇あれば最上階から飛び降りようとする『親友』を

『魔女』が懸命に止めようとする。

そんな毎日だった。

シャーペンや定規でリストカットをしようとした。

時々のカッターやハサミなどの刃物はさすがに取り上げた。

でも、ある日はそうは行かなくなった。

『親友』が家出をした。

『魔女』は絶望感に押しつぶされそうだった。

『魔女』は神に祈った。

オカシイよね。

あだ名とはいえ、魔女が神頼みをするなんて。

でも、『魔女』は『親友』の為なら何だってする。

たとえこの命に代えようとも。

祈りが届いたのか、『親友』は戻ってきました。

でも、『魔女』の本当の苦難は此处からだった。

三年の夏。

隣クラスの女子二人の下靴が無くなる。

彼女達は『魔女』と『親友』の友達。

いや、既に『親友』とは絶交寸前だった。

体育祭先日準備の終盤。

『魔女』は彼女達に呼び出される。

彼女達は言った。

「この前の靴盗まれたの私達なんだけど

あんた何か知らない？」

『魔女』は

「そうなの？」

・・・ごめん本当に知らない」

そう言った

彼女達は口を次のように開いた。

「実は・・・」

私達の靴盗んだのあいっだと思ってるの」

あいっ、それは『親友^{かのじよ}』の名前。

『魔女^{わたし}』はそっつと『親友^{かのじよ}』を見る。

冷たい目で私を見ていた。

これ以上話しては駄目だ。

そう思った。

さっつと話をやめ、すぐ『親友^{かのじよ}』のいた場所に行く。
遅かった。

もう居なかった。

そこに居たクラスメイトに

「あの子知らない？」

と言ったら

「あの子なら、もう教室に戻ったよ？」

『魔女^{わたし}』は走った。

せっかく仲良くなったのに

せっかく親友だって信じられたのに

『親友^{かのじよ}』は教室に居た。

まだ荷物の整理が出来ていなかったようだった。

側に行って話しかける。

返事は、ない。

怒ってる、か。

そう思って私もかける言葉が無く

黙って鞆の整理をする。

『親友^{かのじよ}』が先に帰ろうとした。

このまま見送るのか。

そう思って急いで支度を終え追いかけようとしたら
『親友^{かのじよ}』はちようど教室から出た所だった。

いそいで教室を出る

『親友』は廊下の側の窓を開けて外を見ていた。

『魔女』はほっとして隣に黙って立つ。

「ごめん。」

『親友』は『魔女』の目を見ず言った

「私、本気であんたと絶交しようとした。

本当にごめん

裏切られたと思ったから・・・」

『魔女』は絶交という言葉に一瞬怖くなったが

今は『魔女』では無く『親友』の事を考えろと

『私』が教えてくれた。

「裏切ってないよ。」

君はしてないってはっきり言ったもん」

『魔女』を『親友』は見る。

そう、『魔女』はあの時。

「実は・・・」

私達の靴盗んだのあいっだと思ってるの」

「へえ・・・何で？」

「だって私達の物があいつに盗まれてるのだってかなり前からあったし・・・」

「証拠はあるの？」

「え？」

「あの子がやったって証拠はあるの？」

「それは、ないけど」

「じゃあ確実って訳じゃないでしょ。」

君達には悪いけど

多分あの子じゃない、あの子はあんな事しないよ」

そう言っていたのだ。

心の中では彼女達と同意権だったのに。

『魔女^{わたし}』が魔女と呼ばれたのはもう一つ理由がある。

私はうそつきだった。

いや、人を無意識に騙してしまう

性悪な性格を持っていた。

その性格ゆえの、騙しだった。

その日はちゃんと二人で帰った。

でも、その日から彼女達の物が無くなるのは、頻繁に起こった。

そして、ついにはれると思ったのか

『親友^{かのじよ}』は『魔女^{わたし}』に全てを話した。

「盗んだの、全部私。」

返すのは無理だよ、だって

全部もう燃やしちゃってるし」

その日から、『親友^{かのじよ}』は私の前でも淡々といじめ行為をするようになった

そう、私はこの時にこう決めた。

『親友^{かのじよ}』が悪い方へと突き進むならば

『魔女^{わたし}』は本当に本物の魔女になってやる、と。

嘘を突き通し、彼女を守ろうと。

でも、無理だった。

ある日の臨時学級集会。

集まらされたのは他でもない。

彼女達の受けてきた行為だ。

その全てが『親友^{かのじよ}』の行った犯行。

その大半を『魔女^{わたし}』が見ていた。

そして、先生は言った。

「次にこんな事があったら

警察に捜索願を出す」

と。

これはやばい。

そう思った。

警察の搜索願という大事にならず

『親友』^{かのじよ}を助けてなお

皆が幸せになれる事で

『魔女』^{わたし}に出来る事。

『魔女』^{わたし}は心を鬼にして。

全ての犯行を先生方に放した

犯行だけでは

『親友』^{かのじよ}が一方的に悪いほうにいつてしまうだろうと
自殺を考えていた当時の話も先生方に話した。

『魔女』^{わたし}の話を先生方は

静かに、時に頷き聴いてくれた

それが本当に嬉しくて

なぜか『魔女』^{わたし}は涙があふれ出た。

もう苦しまなくていい。

全て話し終わった次の日

『魔女』^{わたし}は『親友』^{かのじよ}にこういった

「昨日集会で言われたように

次やったら絶対君は警察にお世話になると思う

きつと行きたい高校にも絶対いけなくなるから

もうやらないでおこう？」

と。

『親友』^{かのじよ}は頷く。

その日から『親友』^{かのじよ}はいじめをしなくなった。

『魔女』^{わたし}は晴れて福祉高校に受かった『親友』^{かのじよ}を見て

いままで光が無かった『親友』^{かのじよ}の瞳に

再び光が戻るのを感じた

まるで、昔までの『魔女』^{わたし}のようで

幸せになってくれて本当に良かったと思ったのだ。

長い言葉並べを呼んでくれてありがとう。

『親友』^{かのじょ}のような存在はきっと沢山いると思う。

『魔女』^{わたし}としては

いじめは悪いこと

見るだけでも悪い事。

『魔女』^{わたし}はきっと、死んでも楽な所にはいけないだろう。

『魔女』^{わたし}の背負った罪は大きい。

でも、『魔女』^{わたし}は『親友』^{かのじょ}の荷物を少しだけ預かったただけなのだ

どんなお人よしな人間でも

誰かの罪を丸々背負う事は出来ない。

『親友』^{かのじょ}はこれからも罪を背負って行くだろう。

『魔女』^{わたし}も、うそつきはまだ治っていない。

高校になっても、嘘をつくだろう

大人になっても、嘘をつくだろう。

だって、罪は減るものではなく増えるものでもない。

募れば募るだけ本人が苦しむだけの大雪。

最後まで本当にありがとう。

此処に書いた事は残念だけど嘘じゃないんだ。

ただこんな現実があるんだと思って欲しかったんだ。

じゃあ、また会う日まで。

(後書き)

実話です。

彼女達には悪いけど。

私は魔女だから、嘘を付きます。

そんな私です。

でも、嘘が好きな訳ではありません。

人を騙すのが好きな訳ではありません。

むしろ大嫌いです。

だけど、私は嘘でしか人を守れないちっぽけな人間です。
皆もそうです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4772r/>

『魔女』と『親友』

2011年10月8日20時27分発行